



海洋環境資源研究の重点化

長崎大学では、「熱帯病・新興感染症の地球規模制御戦略拠点」、「放射線医療科学国際コンソーシアム」の2つの21世紀COEプログラムに加え、新たに「海洋環境資源研究」を長崎大学の重点プロジェクトとして推進することが決定されました。これを受けて、アジアや世界における当該分野での中核的拠点形成を、組織的に支援するため、平成17年4月「環東シナ海海洋環境資源研究センター」を全学共同教育研究施設に改組し、4研究部門を設けました。助教授1名、助手1名を採用するとともに兼務教員として関係部局から17名が参加し、韓国・中国の関係機関と連携融合事業「東アジア河口域の環境と資源の保全・回復に関する研究調査」を、すでに開始しています。



環東シナ海海洋環境資源研究センター銘板上掲式

環東シナ海海洋環境資源研究センター発足

4月1日(金)、「水産学部附属海洋資源教育研究センター」は改組拡充によって水産学部から独立し、全学共同教育研究施設の「環東シナ海海洋環境資源研究センター」として新しく発足しました。

環東シナ海海洋環境資源研究センターは、その名前が示す通り東シナ海域とその周辺海域（大村湾、有明海、黄海など）の環境と生物資源を対象とする総合的な研究を推進するとともに、海洋環境の保全および海洋生物資源の育成に関する教育を行い、本学における海洋科学の進展に資することを目的として設置されました。

センターには開放系海域環境資源部門、閉鎖海域環境生態系部門、生物計測・モニタリング部門、国際共同研究部門の4部門がおかれ、水産学部、工学部、環境科学部など学内の他の部局や隣接する独立行政法人水産総合研究センター西海区水産研究所、長崎県総合水産試験場、長崎県衛生公害研究所など学外の関係研究機関と連携を図りつつ、上記の目的を達成するために活動を開始します。また、東シナ海の環境と資源の回復には日中韓の共同研究が必須であるとの認識から、センターでは長崎大学と韓国および中国の海洋・水産研究機関との間の研究交流を活性化するための活動も展開します。近年の海洋環境の悪化と人口増加に伴う漁獲高の増大は海洋資源の枯渇を招きつつあり、人類の将来を左右し

兼ねない様相を呈しています。

この問題をいかに解決してゆくか、新センターが抱える大きな課題です。

環東シナ海海洋環境資源研究センターの 部門別機能

開放系海域環境資源部門：

東シナ海・黄海などの開放系海域を主な対象として、地球規模の環境変化が当該海域の生態系に及ぼす影響および化学物質による海洋汚染の実態を把握するとともに、フィールド調査と室内実験によって環境変化および汚染物質が海洋生物に与える短長期的影響を解明する。これらの研究を通して、海洋生物多様性の保全と資源回復のための情報発信を行っていきます。

閉鎖系海域環境生態系部門：

内湾・河口域や干潟域を主な対象として、生態系の物質循環と生物動態、生物多様性、赤潮発生機構などについて継続的なフィールド調査を生物計測モニタリング部門と協同して進めるとともに、環境汚染や生態系変化の生物影響を実験室レベルで解析します。このような生物生産の変化を引き起こす

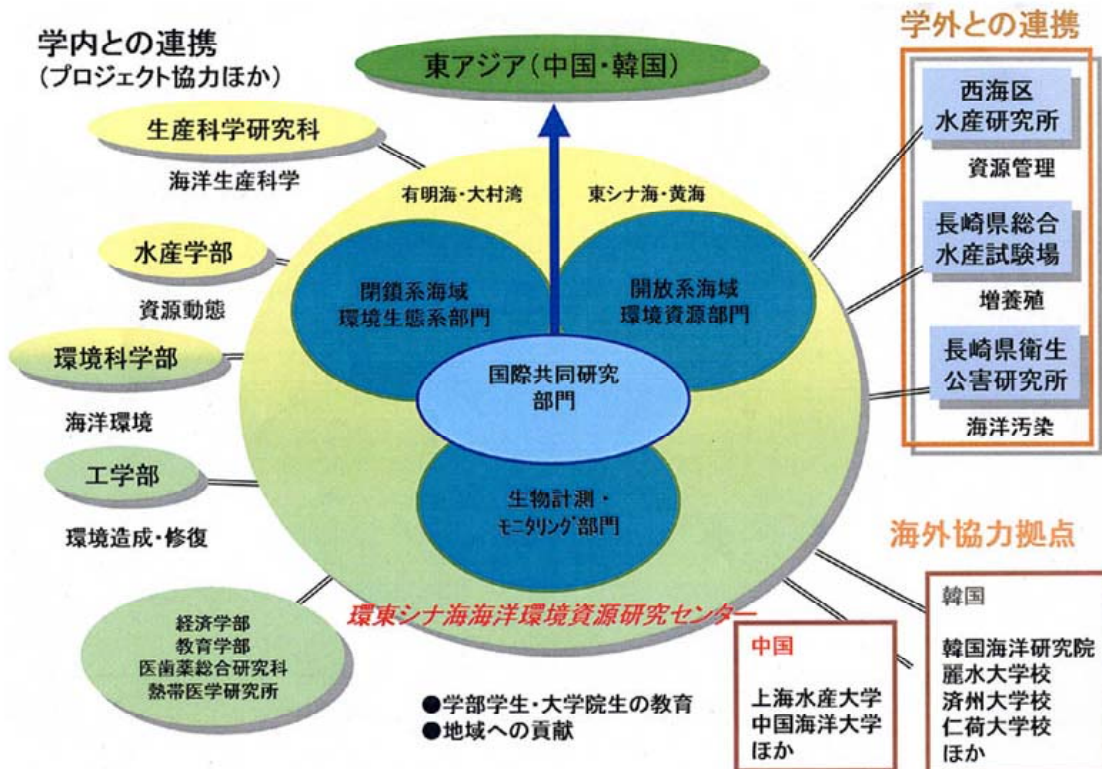
環境や生態系の変化に関する研究活動の蓄積はアジア諸国が抱える同様な問題を解決する手がかりを与えることとなります。

生物計測・モニタリング部門：

海洋生態系の変化を視野に入れ、海洋生物の計測とモニタリングの手法開発と実用化を推進します。海洋環境に対する人間活動の影響の程度やそれに対する生態系の応答などを適切に診断・評価するためには、その基礎となる環境の経時的な変化を継続して計測・モニタリングすることが必要です。東シナ海とその周辺海域を主な対象として、最新のバイオロギング技術を駆使して、高次捕食動物をプラットフォームとする生息環境と生態情報計測システムの開発とその応用を進めます。

国際共同研究部門：

東アジアの海洋環境・生物情報を集中管理するデータベースの機能を発揮するとともに、東アジア諸国の水産・海洋研究機関との国際共同研究を主体的に推進し、その企画立案、海外研究者の受け入れ及び日本人研究者の派遣、国際シンポジウムの開催など、国際共同研究推進のためのオーガナイザーとしての役割を担います。これらの活動を通して、本センターが「環東シナ海」の環境資源回復のための研



究ネットワークの拠点となることを目指しています。

第1回環東シナ海海洋環境資源研究センターシンポジウムの開催

文教町キャンパス総合教育研究棟 2F において、平成 17 年 7 月 8 日には、環東シナ海海洋環境資源研究センターの今後の研究活動等に関して紹介する開設シンポジウムが、また、9 日には Marine Ecophysiology と題した学術シンポジウムが開催されました、

第1回 IEC SRシンポジウム

長崎大学環東シナ海海洋環境資源研究センター
(Institute for East China Sea Research)シンポジウム

共催: 独立行政法人水産総合研究センター西海区水産研究所、長崎県総合水産試験場

日時: 2005 年 7 月 8 日～9 日

場所: 長崎大学文教町キャンパス
総合教育研究棟 2F 多目的ホール

プログラム

8 日、新センター開設シンポジウム

16:00～17:30

新センター開設の挨拶: 松岡センター長
新センターの研究活動について: 松岡センター長
新センターの活動と東シナ海研究に関する討議

9 日、学術講演

(第 6 回 Marine Ecophysiology シンポジウム)

10:00～11:30

山砥 稔文 (長崎県総合水産試験場)
「長崎県沿岸に分布する *Cochlodinium polykrikoides* の増殖特性」

石松 惇 (環東シナ海海洋環境資源研究センター)
「二酸化炭素が海産生物に及ぼす影響: 大気中からの拡散による慢性影響と海洋隔離による急性影響」

神原 淳 (三重大学)
「魚類の自発摂餌と外部環境要因」

13:00～15:00

青木 純哉 (環東シナ海海洋環境資源研究センター)
「ウナギ薬物誘導型シトクロム P450 遺伝子の構造解析」

香川 浩彦 (宮崎大学)
「生理学的知見から推定されるウナギの繁殖生態-生理学と生態学の接点-」

小林 亨 (水産総合研究センター養殖研究所)
「魚類性分化機構解明の現状」

征矢野 清 (環東シナ海海洋環境資源研究センター)
「ハタ科魚類の生殖腺発達と成熟」

環東シナ海海洋環境資源研究センターを中心に進められている重点研究以外にも、長崎大学では、様々な環境関連研究プロジェクトが進められています。部局単位、個人レベルで進められている研究に関して、本年度は、各学部等(専門分野)における特色ある取組として、52 ページ以降で、そのうちの幾つかの研究活動を、さらに紹介することとしました。